

小栗鉄次郎による嵩山蛇穴洞穴遺跡発掘調査記録について（2）

村上 昇

1. はじめに

豊橋市嵩山町に所在する嵩山蛇穴洞穴遺跡（以下、嵩山蛇穴）は、主に縄文時代から古代にかけて利用された洞穴遺跡（註1）である。昭和16年（1941）に国史跡仮指定を、昭和32年（1957）には国史跡指定を受けている。文化庁文化財保護部史跡研究会監修による『図説 日本の史跡』には、「この地方ではまれな洞窟遺跡であることが判明して注目され、学術上、価値高いものとして（中略）史跡に指定された。（伊藤1991）」と、その指定理由が記載されている。また、文化庁が公開している『重要文化財等データベース』（<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index>）の詳細解説には、「字浅間下にあり、山梁中に存する石灰洞窟で入口は狭いが北方に向かって約50メートル深くつづき、奥部は西に折れて拡がっている。遺物は主として入口近くの堆積土より発見されるもので、押型文土器・石鎌・石斧・骨器等を含んでいる。この洞窟は遺物において早期縄文式文化の痕跡を示すものを有しており、この時代の洞窟遺跡として類例の少ないものである。」とある。これらは嵩山蛇穴とその史跡としての価値について解説したものであるが、どのような文脈で理解すべきだろうか。調査報告書が刊行されなかったこともあり、嵩山蛇穴の発掘調査に至る経緯とその後の経過、国史跡仮指定と国史跡指定の背景—特に、史跡として評価された点—を理解することは難しい。

嵩山蛇穴では、これまで計4回の発掘調査が行われたとされている。この内、戦前の小栗鉄次郎による発掘調査については、出土資料の大半を豊橋市教育委員会が保管しており、調査記録を名古屋市博物館と豊田市博物館が所蔵している。本稿では、前稿で筆者が翻刻した小栗による発掘調査報告の草稿（『嵩山蛇穴に関する調査』）（村上2019）をはじめとする、これら小栗が残した記録類を中心に嵩山蛇穴に関する調査経過を把握し、当時の研究動向と対比しながら発掘調査に至る経緯と、史跡指定の際に評価された点とその背景を確認する（註2）。

なお、嵩山蛇穴の概要については、岩瀬1993、齊藤2002、畑山ほか2015、村上2019などを参照したい。

2. 小栗の調査記録に基づく時系列の整理

小栗による嵩山蛇穴に関する調査記録には、『嵩山蛇穴に関する調査』、野帳、日誌、手紙類、行政文書がある。『嵩山蛇穴に関する調査』（以下、『草稿』とする）は、昭和18年（1943）に書かれた発掘調査報告の草稿で、名古屋市博物館が所蔵している。『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』へ掲載するための下書きと考えられる（村上2019）。小栗が残した野帳や日誌、手紙類は、豊田市博物館が所蔵しており、本稿をまとめる際にその一部を確認した。

小栗の野帳は、記録した年や調査対象ごとに分かれている。その中から、嵩山蛇穴と愛知県一宮市所在の馬見塚遺跡に関する箇所を抜粋したものが『小栗鉄次郎の野帳より（2）（嵩山蛇穴・馬見塚）』（以下、『野帳抄』とする）である。また、日誌については、考古学や文化財などに関する記載が『小栗鉄次郎の日誌抄』（以下、『日誌抄』とする）としてまとめられている。これら記録類に残された記載を時系列に沿って整理することにより、第1次発掘調査から国史跡仮指定に至る経過の詳細なトレースが可能となる（表1）。なお、『野帳抄』に記載された各調査の出土遺物一覧は、表2のとおりである。

まずは、第1次発掘調査までの経過を確認する。小栗が嵩山蛇穴調査と関わる契機となったのは、昭和16年(1941)3月刊行の『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第二十』に掲載された田中和三郎による天然紀念物としての嵩山蛇穴の調査と考えられる(田中1941)。田中の報告で用いられた嵩山蛇穴の写真は、小栗が撮影したものとされる(川合編2004)。これが正しいとすれば、小栗は第1次発掘調査より前に嵩山蛇穴に出向いていたことになる。ただし、第1次発掘調査が行われた昭和16年(1941)の日誌に残された、嵩山蛇穴に関する記述は多くはない。第1次調査直前の同年11月18日の記載に、嵩山蛇穴が所在する石巻村(当時)への出張の許可を得たことが記される程度である。同年の日誌で目立つのは、名古屋市大曲貝塚についての記述であり、嵩山蛇穴調査に至る理由については判然としない。その一方、同年10月8日には「人類学雑誌 土佐の佐川洞窟遺蹟其他を読む」とある。『人類学雑誌』第56巻第9号に掲載された長谷部言人・酒詰仲男による高知縣城ノ台洞窟の報告(長谷部・酒詰1941)について特に触れていることから、嵩山蛇穴発掘調査に備えて洞窟遺蹟調査の情報を集めていることが窺われる。かくして、同年11月20日に、第1次発掘調査が行われた。

次に、第1次発掘調査後の出来事を見ていきたい。小栗は文部省の上田三平と古谷清に意見を求めるべく、第1次発掘調査翌日の昭和16年(1941)11月21日に調査結果を文部省に郵送している。同年12月3日の電話協議では、上田が愛知県による再調査を促し、小栗はその指示に従って、第2次調査の実施と史蹟名勝天然紀念物保護法に基づく国史跡仮指定を進めている。上田の指導助言に基づいて嵩山蛇穴の国史跡仮指定と第2次発掘調査が行われた点は、重要である。

戦後の国史跡指定に至る経緯に関して注目されるのは、昭和28年(1953)に石巻村へ送付された『石巻嵩山蛇穴先史時代遺蹟発掘調査報告書』(以下、『報告書』)である。この『報告書』は、愛知県教育委員会を經由して、昭和31年(1956)1月付で原川社 代表役員 丸地文男より提出の指定申請書とともに文化財保護委員会へ送付された『嵩山蛇穴先史時代遺蹟発掘経過報告』を指すと考えられる。そこでは、前述の「草稿」の内容がより簡潔にまとめられているが、後述する江坂輝彌等による第4次発掘調査については触れられていない。この史跡指定申請と前後して、昭和30年(1955)12月には出土資料が豊橋市に寄贈され、さらに昭和32年(1957)に正式に国史跡に指定されている。石巻村は、昭和30年(1955)3月末に豊橋市と合併しているため、『報告書』は豊橋市教育委員会に引き継がれ、史跡指定申請に係る事務を豊橋市教育委員会が担ったと推察される。豊橋市への出土遺物寄贈は、国史跡指定に係る一連の行政手続きと連動した出来事であった。

3. 研究動向との対比

小栗による調査記録だけでは、嵩山蛇穴の発掘調査に至る経緯と、史跡として評価された点を理解することは難しい。そのため、関連する当時の考古学の研究動向—押型文土器研究と洞窟遺蹟研究の動向—との対比から、嵩山蛇穴の調査経過を捉え直したい。

まずは、押型文土器研究の動向を概観する。昭和16年(1941)11月20日に行われた第1次発掘調査では山形押型文土器が出土している(表2)。押型文土器の内、楕円押型文土器については、類例の報告は遅くとも1920年代から認められる(表3)。管見では、最も早く楕円押型文土器に言及したのは鳥居龍蔵のようである(鳥居1924ab)。1930年代には、日本列島西部における最古の縄文土器として押型文土器が注目されるようになる。当時、日本列島では旧石器時代の遺跡は確認されていないため、押型文土器は日本列島における最古の遺物に位置付けられ、日本列島への人類の進出と縄文土器および縄文文化起源論の文脈上で注目された。

しかしながら、小栗の記録類には、山形押型文土器に注目した記述は認められない。『野帳抄』

表1 小栗鉄次郎記録類に基づく時系列

年	月日	出来事	
不明		嵩山蛇穴を撮影か	
1941年	昭和16年	10月8日	城ノ台洞窟の報告に触れる ・『人類学雑誌』掲載の高知県城ノ台洞窟の報告（長谷部・酒詰1941）を読む。【日誌】
		11月18日	石巻村へ出張許可 ・石巻村出張の許可が下りる。【日誌】
		11月20日	小栗による嵩山蛇穴第1次発掘調査 ・朝、豊橋へ電車で移動。【野帳、日誌】 ・午前中、嵩山蛇穴の写真撮影。【草稿、野帳、日誌】 「風穴」も撮影。【日誌】 ・「前室」の西側奥を試掘し、シジミ、ハマグリ、獣骨、河原石（敲石？）、縄文土器、弥生土器が出土 埋め戻して3時頃に終了。【草稿、野帳、日誌】 ・嵩山蛇穴上の古墳様のもの（石灰窯）を確認。【日誌】
		11月21日	文部省への連絡と、上田三平の嵩山蛇穴国史蹟仮指定の指示 ・文部省の上田三平と古谷清宛に調査結果を郵送し、意見を求める。【野帳・日誌】
		12月3日	文部省との電話協議 ・文部省の上田三平と電話協議。【野帳、日誌】 ・上田からの回答。【野帳、日誌】 早急に県が調査した方がよい。 近日中の文部省職員の出遣は難しい。 史跡仮指定については電報で打合せするように。 嵩山蛇穴の発掘調査について、東京帝大人類学教室等と協議する必要は無い。
		12月6日	石巻村へ連絡 ・石巻村長宛に、12月10・11日に嵩山蛇穴調査のため出張することを通知。【野帳】
		12月8日	電話で石巻村に調査協力を依頼。【野帳】
		12月10日	小栗による嵩山蛇穴第2次発掘調査 ・樋口敬治を伴い、嵩山蛇穴へ。【草稿、野帳、日誌】 ・午前、前庭部を調査。出土遺物希薄。【草稿、野帳、日誌】 ・その後（午後か？）、「内室」を発掘 炉址を検出 遺物多数。【草稿、野帳、日誌】 ・押型文土器出土。【草稿】 ・後藤一男方に宿泊。【野帳、日誌】
		12月11日	前日に続き、「前室」を発掘。河原石（敲石？）、尖底土器片（押型文土器）が出土。【草稿、野帳】 ・午後、「内室」を発掘するが、先史時代の遺物は希薄。【草稿、野帳、日誌】
		12月16日	嵩山蛇穴の国史蹟史跡仮指定 ・嵩山蛇穴国史蹟仮指定の決裁を受ける。【日誌】
1942年	昭和17年	1月20日	嵩山蛇穴国史蹟仮指定。【野帳】
		3月11日	小栗による嵩山蛇穴第3次発掘調査 ・文部省の上田三平の実地踏査。【草稿、野帳】 ・「前室」を再発掘し、炉址を再検出。【野帳】 ・「風穴」「新穴」を見学。【野帳】
		12月23日 12月24日	八幡一郎・酒詰仲男からの所見を得る ・東京帝国大学による高蔵遺跡発掘調査に参加。【野帳】 ・酒詰仲男、八幡一郎より遺物の所見をもらう。【草稿】
1943年	昭和18年	7月16日	鈴木尚・中島寿雄からの所見を得る ・中島寿男愛知県庁来庁。【日誌】
		7月20日 7月21日	鈴木尚、中島寿雄の嵩山蛇穴視察。【草稿、日誌】
		12月1日	『草稿』の執筆 ・『草稿』の執筆。【草稿】
1947年	昭和22年	—	江坂輝弥らによる嵩山蛇穴第4次発掘調査 ・江坂輝弥・久永春男・紅村弘・後藤辰男が嵩山蛇穴を発掘調査したとされる（第4次発掘調査）【木下1975】
		2月4日	江坂輝弥からの資料実見の打診 ・江坂輝弥が、手紙で小栗所蔵の嵩山蛇穴出土遺物の資料実見を打診する。（同日付江坂輝弥からの手紙）
		3月16日	江坂が出土遺物を借用 ・江坂輝弥、嵩山蛇穴出土遺物を借用【野帳】
		3月23日	江坂輝弥からの礼状と函面提供依頼 ・江坂輝弥より、資料借用の対するお礼と、嵩山蛇穴発掘調査函面の提供依頼。【同日付江坂輝弥からの手紙】
		4月15日	江坂輝弥より嵩山蛇穴出土遺物の写真送付 ・江坂輝弥、借用した嵩山蛇穴出土遺物を撮影した写真を小栗へ送付。【同日付江坂輝弥からの手紙】
1949年	昭和24年	6月14日	嵩山蛇穴報告の執筆依頼 ・伊奈森太郎が来宅し、嵩山蛇穴の「報告」の執筆を依頼される【日誌】
1953年	昭和28年	3月19日	『報告書』を石巻村へ送付 ・「石巻嵩山蛇穴先史時代遺蹟発掘調査報告書」を清書し、石巻村長宛に送付【日誌】
1955年	昭和30年	12月28日	嵩山蛇穴出土資料を豊橋市へ寄贈 ・豊橋市教育委員会職員・浅野伸夫が来宅し、嵩山蛇穴出土資料を受け取る（豊橋市へ寄贈）【日誌】
1956年	昭和31年	1月	国史蹟指定申請 ・原川社代表役員 丸地文男より文化財保護委員会宛に嵩山蛇穴の史跡指定を申請。その後、同年2月6日、愛知県教育委員会から文化財保護委員会へ進達。
1957年	昭和32年	7月1日	嵩山蛇穴の国史蹟指定

※【 】内は、当該の出来事が記録された資料

補足説明

風穴：嵩山蛇穴近くにある、豊富に水が湧き出る鍾乳洞。現在は「水穴」と呼ばれる。

新穴：嵩山蛇穴より西側にある「嵩山の新穴」のことか。

前室・内室：嵩山蛇穴開口部直近の空間（前室）とその奥の空間（内室）を指す。いずれも小栗による呼称。

表2 『野帳抄』に記載された出土遺物一覧

品名	昭和16年11月20日			同12月10日			同12月11日			17年12月11日										
土器	胴部	縄文あるもの	5	口縁部	薄手山型文	1	口縁部	薄手山型文	1											
		山形の押型文	1		同波状押型文	1		同波状押型文	1											
		素文	3		一部に縄文一孔	1		上縁縄文	1											
					底部	素文(赤褐色)	1		内外面				素文	1						
						胴部	押型文						山型文	1	胴部	縄文	1			
																薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					
												薄手土器	刷毛目様	1	薄手土器	素文	4			
												素文	2	素文	2					

土が第2次発掘調査の実施と嵩山蛇穴の国史跡仮指定に至る直接的な要因とは言い難い。また、戦後に文化財保護委員会に提出された申請書と『報告書』にも、押型文土器の出土を強調する記載は認められない。国史跡指定において、押型文土器の出土が直接的要因となったとは判断出来ない。

なお、昭和22年(1947)には、江坂輝彌、久永春男等によって嵩山蛇穴の第4次発掘調査が行われたとされる(紅村1963、木下1975)。豊田市博物館が所蔵する昭和22年(1947)2月4日付の江坂から小栗に宛てた手紙によれば、当時、江坂はジェラード・クロードが千葉県市川市に設立した日本考古学研究所の研究所員であり、嵩山蛇穴の現地踏査を行ったものの、既に主体部は国民学校の「踏査」により掘り返され、遺物包含層は残されていないと判断したという。同様の記述は久永春男の日記にも認められる(野帳の会編2013)。この江坂らの踏査が第4次発掘調査に相当するかどうかは判然としない。当時、江坂が縄文土器起源の南北二系統論を展開していたことと(江坂1942・44・48)、前述の手紙に同研究所が縄文時代早期遺跡の調査に注力している旨が記されていることから、江坂らの調査は第4次調査が押型文土器とこれに伴う遺物の層位的な確認を目的としていた蓋然性は高い。しかしながら、詳細な記録は管見では見当たらず、出土遺物と記録類を確認していないため、その調査内容と成果の詳細は不明である。

次に、洞窟遺跡研究の動向を概観する。押型文土器の出土が第2・3次発掘調査の実施と国指定仮指定の要因ではないとすれば、他の可能性として、嵩山蛇穴が先史時代の洞窟遺跡であると確認されたこと自体に求められる。日本における洞窟遺跡研究は明治10年代の北海道手宮洞窟の調査に始まる(表3)。1910年代には富山県大境洞窟の発掘調査が行われ、これを契機に各地で洞窟遺跡の調査が盛んになる。なお、大境洞窟は大正11年(1922)に国史跡に指定されている。1920年代の研究で注目されるのは、大山柏による岩手県南部における洞窟遺跡調査である(大山・八幡1925)。洞穴遺跡の研究を軸に旧石器時代研究が進展した当時のヨーロッパに倣い、日本列島における旧石器時代の存否問題を念頭に置いた調査であった。旧石器時代研究との関連で洞窟遺跡研究が進展したことは特筆される。その後、大場磐雄が先史時代の洞窟遺跡研究を総括した1930年代には(大場1934)、洞窟遺跡は縄文時代及び弥生時代の住居に関係する遺跡であるとする認識が広まっていく(柴田1927、大場1967)。さて、この時に大場が示した分布図からは、東海地方では洞窟遺跡が未確認であることがわかる。小栗が嵩山蛇穴第1次発掘調査を行った1941年当時、東海地方は洞窟遺跡の空白地帯であり、調査成果は東海地方における洞窟遺跡の空白を埋めた初の事例となった。このことが、冒頭で触れた「この地方ではまれな洞窟遺跡(伊藤1991)」という評価につながり、国史跡仮指定と後年の国史跡指定における嵩山蛇穴の史跡としての評価でもあったと理解出来る。

ここで注目したいのは、上田三平の存在である。小栗の調査を指導した上田には、洞窟遺跡研究の実績がある。上田は喜田貞吉の勧めで大境洞窟遺跡の報告をまとめており(上田1918)、嵩山蛇穴の発掘調査成果の意義を逸早く理解出来たと考えられる。それ故に、小栗に調査に対する指導と助言をするとともに、国史跡仮指定を指示することが出来たのではないか。

以上から、嵩山蛇穴は、それまで空白地帯であった東海地方において初めて確認された先史時代の洞窟遺跡であることが評価され、国史跡に仮指定されたと理解出来る。また、洞窟遺跡について研究実績を有する深い上田により史跡としての価値が評価されたことが、嵩山蛇穴が国史跡に仮指定されるに至る重要な契機であり、後年の国史跡指定につながったと考えられる。その一方、国史跡指定申請書には江坂らによる第4次発掘調査の成果は盛り込まれていないことが確認出来る。

表3-1 嵩山蛇穴の調査と研究動向の対比

1878年	明治11年				古代文字への関心	榎本武揚、手宮洞窟壁画について東京帝国大学に報告したとされる（小樽市教育課編1937）
1880年	明治13年					J. Milne、北海道手宮洞窟の壁画を紹介（Milne1880）
1891年	明治24年	12月				江藤正澄、福岡県沖ノ島洞窟遺跡（御金藏）出土遺物の紹介（江藤1891）
1894年	明治27年	2月				若林勝邦、北海道手宮洞窟採集の「三角形の石器」を報告（若林1894）。
1896年	明治29年	4月				坪井正五郎、北海道手宮洞窟の「彫刻」を検討（坪井1896）
1909年	明治42年	10月				高橋健自、福井県甲楽城の洞窟調査を報告（高橋1909）【弥生時代】
1911年	明治44年	7月				『北海道名勝誌』に「手宮岩壁」彫刻として紹介（北海道庁1911）
1913年	大正2年	10月				鳥居龍蔵、北海道手宮洞窟の古代文字を北方系の文字（古突厥のツケウ文字）と評価（鳥居1918）
1918年	大正7年	4月、5月				中目 覚、北海道手宮洞窟の古代文字を靺鞨語とする（中目1918）
		7月				大境洞窟の調査と層位
		10月				富山県大境洞窟における遺物発見と柴田常憲の調査（柴田1918）
		不明				上田三平、喜田貞吉の勧めで大境洞窟の調査概要を紹介（上田1918）
1919年	大正8年					長谷部言人、大境洞窟の発掘調査報告の中で、層位と遺物の変遷を示す（長谷部1918）
1920年	大正9年	5月				松村謙一、大境洞窟出土の埋葬人骨を紹介（松村1918）
1921年	大正10年	3月				長谷部言人、山形県吹浦一本木貝塚（吹浦洞窟）の報告内で、崖面の洞窟遺跡に触れる（長谷部1919）
		11月				佐藤伝蔵、大境洞窟の層位を報告（佐藤1920）。
1922年	大正11年	3月				手宮洞窟、国史跡に指定
1924年	大正13年	9月				大境洞窟が国史跡に指定
		12月				赤星直忠、神奈川県鴨居洞窟の報告（赤星1924ab）【古墳時代】
1925年	大正14年	3月				鳥居龍蔵、『下伊那の先史及原史時代』において弥生土器の拓本集成の中で「穀粒紋」のものとして紹介（鳥居1924）
		8・9・11月				鳥居龍蔵、『諏訪史』の中で「穀粒状の紋様」として取り上げる（鳥居1924）
		8～9月				鳥居龍蔵、押型文を「網状のものを押し込んだもの」と解釈（鳥居1926）
1926年	大正15年/昭和1年					長山源雄、大分県直入郡柏原村（現竹田市）採集の押型文土器を含む資料を紹介（長山1927）
1927年	昭和2年	1月				赤星直忠、神奈川県鴨居洞窟の報告（赤星1927）。
		5月				増井経夫、千葉県舟崎洞窟、編織穴、本寿寺洞窟の発掘調査を報告（増井1927）【縄文時代・弥生時代】
		9月				柴田常憲、石器時代の住居跡の事例として洞窟遺跡を挙げる（柴田1927）
1928年	昭和3年	1月				両角守一、長野県古岩窪洞窟の報告（両角1928）【古墳時代】
		3月				千葉県興津町（当時）守谷畑尻の洞窟（編織穴洞窟か）を紹介（千葉県1928）
		10月				八幡一郎、『南佐久郡の考古学的調査』の中で押型文土器2種（山型文と楕円文）を紹介（八幡1928）
1929年	昭和4年	11月				赤星直忠、神奈川県三戸遺跡出土資料の報告の中で、「細い網を押し付けた」文様として押型文土器を紹介（赤星1929）
1930年	昭和5年	5月				山内清男、縄文が縄文原体の回転施文によるものであることを解説（山内1930）
1932年	昭和7年	2月				小山眞夫、長野県岩屋堂古墳の報告（小山1932）【古墳時代】
		4月				山本 博、福岡県関の山洞窟の報告（山本1932）【弥生時代】
		11月				齋藤 勝、福井県茂原村（現越前町）付近の洞窟（長須洞穴群・赤壁洞穴群か？）の報告（齋藤1932）【弥生時代？】
1933年	昭和8年	1月				大場馨雄、千葉県安房神社境内洞窟発掘調査を報告（大場1933）【弥生時代】
		3月				小金井良精、千葉県安房神社境内洞窟出土人骨の報告（小金井1933）【弥生時代】
		6月				杉山寿英男、古式縄文土器として北海道の押型文土器を紹介（杉山1933）
		7月				神田五六・金井喜久一郎、長野県荷取洞窟の調査報告（神田・金井1933a）【縄文時代・古墳時代】
		9月				町田 生、長野県荷取洞窟の踏査報告（町田1933）。
						醉古 生、長野県荷取洞窟の見学を報告（醉古1933）
						八木貞助、長野県荷取洞窟の地質を報告（八木1933）【縄文時代・古墳時代】
						神田五六・金井喜久一郎、長野県荷取洞窟の調査報告を補足（神田・金井1933b）【縄文時代・古墳時代】
						金子富雄、長野県荷取洞窟の調査概報（金子1933）【縄文時代・古墳時代】

表3-2 嵩山蛇穴の調査と研究動向の対比

年	月日	関連事項	押型文土器研究ほか	洞窟遺跡研究
1934年	昭和9年	1月	施文方法の解明 山内清男、押型文土器が古式縄文土器である可能性に触れると共に、押型文の原体が丸棒状工具を彫刻したものであると指摘（山内1934） 七田忠志、佐賀県戦場ヶ谷遺跡出土の押型文土器を弥生土器の一種として紹介（七田1934a） 小林久雄、熊本県の押型文土器の事例を報告。古式縄文土器という認識を示す（小林1934） 七田忠志、佐賀県戦場ヶ谷遺跡出土の押型文土器を縄文土器（押型文土器）と訂正しつつも、押型文が弥生土器にも見られると主張（七田1934b） 江馬修、岐阜県飛騨地方の押型文土器について紹介（江馬1934） 小林行雄、押型文が彫刻された棒状工具による回転施文によるものと指摘（小林行雄1934） 山内清男、関西の古式縄文土器の系統として押捺文土器（押型文土器）を紹介（山内清男1935）	大場磐雄による洞窟遺跡調査の総括
		3月		
		6月		
		7月		
		8月		
		12月		
1935年	昭和10年	1月	西日本における最古の縄文土器として押型文土器が話題に上る。また、対談中、縄文土器の伝播経路として、北海道経由と九州経由の2系統の可能性が示される（江上ほか1936）	大場磐雄、先史時代洞窟遺跡研究を総括（大場1934）
1936年	昭和11年	2月	山内清男、「広義の諸磯式」より前の尖底土器群を早期として設定（山内1937）	小林久雄、宮崎県尾平野洞窟の報告（小林1937） 【縄文時代】 ※前年に宮崎県により史跡仮指定されたことある。現在は県指定史跡。 佐々木謙・小林行雄、島根県崎ヶ鼻洞窟と権現山洞窟の報告（佐々木・小林1937）【縄文時代】 直良信夫、島根県崎ヶ鼻第1号洞窟と権現山洞窟の自然遺物を報告（直良1937）。【縄文時代】 樋口清之・乙益重隆、鹿児島県日本山洞窟調査を報告（樋口・乙益1938）【縄文時代・前期】 杉山寿栄男、北海道岡島洞窟の報告（杉山1938）。【縄文～弥生時代】 直良信夫・吉田裕、島根県崎ヶ鼻（サルガ鼻）洞窟の発掘調査報告（直良・吉田1939）【縄文時代】
		5月		
1937年	昭和12年	2月	山内清男、関西方面の最古の縄文土器として、押型文土器を挙げる（山内1939）	川田信敏、高知県佐川町（当時）出土の押型文土器の紹介（川田1941） ※出土したのは石灰洞跡とされる。
		10月		
1938年	昭和13年	3月	※天然記念物としての嵩山蛇穴の報告（田中和三郎1941）	小牧實繁・直良信夫・藤岡謙二郎、滋賀県佐目風穴の報告（小牧・直良・藤岡1941）【縄文時代】 長谷部言人・酒詰伸男、高知県城ノ台洞窟の報告（長谷部・酒詰1941）【縄文時代・早期後半】
		7月		
1939年	昭和14年	8月	小栗による発掘調査（1回目） 11月21日 文部省への連絡と、仮指定の指示 12月3日 小栗による発掘調査（2回目） 12月10日 12月11日	南北二系統論 江坂輝彌、縄文土器の北方系（貝殻沈線文土器）と南方系（捺糸文土器）の南北二系統論を提示（江坂1942） 江坂輝彌、北方系の櫛目文系（貝殻沈線文土器）と南方系（押型文・捺糸文土器）の南北二系統論を提示（江坂1944） 江坂輝彌・久永春男・紅村弘ら、嵩山蛇穴を発掘調査。 江坂輝彌、北方系の櫛目文土器と南方系の押型文土器の南北二系統論を展開（未完）（江坂1948）
		12月		
1941年	昭和16年	3月	史跡仮指定	戦後の洞窟遺跡研究
		8月		
1942年	昭和17年	3月11日	八幡一郎・酒詰伸男の所見を得る	榑倉亮吉ほか、山形県吹浦遺跡の発掘調査報告（榑倉ほか1955）【縄文時代・前期】 江坂輝彌、北海道から九州の洞窟遺跡を集成（江坂1955）
		8月1日		
1943年	昭和18年	7月16日	鈴木尚・中島寿雄の所見を得る	『草稿』の執筆
		7月20日		
1944年	昭和19年	7月21日		紅村・江坂らが嵩山蛇穴を発掘調査
		12月1日		
1947年	昭和22年	7月25日	伊奈森太郎より嵩山蛇穴報告の執筆を依頼される	
1948年	昭和23年	3月31日	「発掘調査報告書」の完成と、右巻村への送付	
1949年	昭和24年	6月14日		
1953年	昭和28年	3月19日	嵩山蛇穴出土資料を豊橋市へ寄贈	
1955年	昭和30年	3月31日	原川社から文化財保護委員会へ国史跡指定申請	
1956年	昭和31年	12月28日		
		1月		
1957年	昭和32年	7月1日	嵩山蛇穴洞窟遺跡が国史跡に指定	

※洞窟遺跡調査研究史については、大場 1967、麻生 2001 などを基に作成。戦後は日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会を中心とする洞窟遺跡の調査研究が盛んになるが、本表ではその多くを省略している。

4. おわりに

以上、小栗鉄次郎が残した記録類を基に、小栗による嵩山蛇穴の調査経過をトレースすると共に、嵩山蛇穴が国史跡仮指定と国史跡指定において評価された点とその背景を確認した。嵩山蛇穴は、東海地方において確認された稀少な先史時代の洞窟遺跡であること自体が評価され、史跡に指定された蓋然性が高い。そして、洞窟遺跡研究の実績がある上田三平が小栗の調査を評価するとともに指導したことが、嵩山蛇穴の国史跡仮指定とその後国史跡指定に結び付いたと考えられる。また、小栗が嵩山蛇穴に関わる契機となったのは、田中和三郎による天然記念物としての嵩山蛇穴の調査であると考えられる。ただし、当時の小栗の日誌の記事の多くを占めるのは、名古屋市大曲貝塚に関するものである。当時の小栗の関心事は嵩山蛇穴ではなく大曲貝塚であったと考えられ、嵩山蛇穴発掘調査に至った理由については、不明なままである。

さて、嵩山蛇穴の調査研究において忘れてはならないのが江坂輝彌等による調査である。江坂が所属していた日本考古学研究所の所蔵資料は、千葉県市川市と南山大学人類学博物館が所蔵しているという（領塚 2019）。また、江坂の蔵書類は、八戸市埋蔵文化財センターに寄贈されている。今後は、これらの資料を基に、江坂らの嵩山蛇穴調査の内容を確認する作業が必要となる。引き続き嵩山蛇穴の調査研究について追跡作業を行いたい。

謝辞

小栗家資料の閲覧では、豊田市博物館からご高配を頂きました。本稿をまとめるにあたっては、水ノ江和同、森 泰通、永田悠記、中島 学、久住祐一郎の各氏から、多くのご協力と有益なご教示を頂きました。この場を借りて謝意を表します。

（豊橋市文化財センター 主任学芸員）

註

- 1 遺跡名称としての「洞穴」と「洞窟」には、厳密な定義の違いは認められない（麻生 2001）。「洞穴」の方がより包括的な意味合いが強いと考えているため、普段、筆者は「洞穴」を使用している。しかしながら、取り扱う遺跡名に「洞窟」を用いるものが多く、文章中での使い分けの煩雑さを避けるため、論題と冒頭の1文を除き、本稿では「洞窟」を用いることにする。ただし、引用部分と文献名等については、この限りではない。
- 2 洞窟遺跡の研究史については、大場 1934・1967、江坂 1955、麻生 2001、白石 2014、水ノ江 2020などを参考にした。

参考文献

- 赤星直忠 1924a 「鴨居洞穴の発掘」『考古学雑誌』第14巻第12号 考古学会
赤星直忠 1924b 「其後の鴨居洞穴発見遺物」『考古学雑誌』第14巻第13号 考古学会
赤星直忠 1925 「相州鴨居の横穴（1～3）」『考古学雑誌』第15巻第8・9・11号 考古学会
赤星直忠 1927 「骨製品を発見す」『考古学雑誌』第17巻第1号 考古学会
赤星直忠 1929 「相模三戸遺跡」『考古学雑誌』第19巻第11号 考古学会
麻生 優 2001 『日本における洞穴遺跡研究』
伊藤 稔 1991 「嵩山蛇穴」『図説 日本の史跡』狩野 久ほか編 同朋舎出版
岩瀬彰利 1993 「嵩山蛇穴遺跡再考」『三河考古』第5号 三河考古刊行会
上田三平 1918 「越中水見郡大境洞窟内の弥生式遺跡」『歴史地理』第32巻第4号 日本歴史地理学会
江上波男・後藤守一・山内清男・八幡一郎・甲野勇 1936 「座談会 日本石器時代文化の源流と下限を語る」『ミネルヴァ』第1巻第1号 翰林書房

- 江坂輝彌 1942 「稲荷台系文化の研究」『古代文化』第13巻第8号 日本古代文化学会
- 江坂輝彌 1944 「回転押捺文土器の研究」『人類学雑誌』第59巻第8号 日本人類学会
- 江坂輝彌 1948 「回転押捺文土器の研究(1)」『あんとろぼす』Vol.3No.1 山岡書店
- 江坂輝彌 1955 「日本の洞窟遺跡」『吹浦遺跡』荘内古文化研究会
- 江藤正澄 1891 「瀛津嶋紀行」『東京人類学雑誌』第7巻第69号 東京人類学会
- 江馬 修 1934 「飛騨に於ける古式縄紋土器」『石冠』第2年第3号 飛騨考古土俗学会
- 大場磐雄 1933 「安房神社境内発見古代洞窟調査概報」『史前学雑誌』第5巻第1号 史前学会
- 大場磐雄 1934 「本邦上代の洞穴遺跡」『史前学雑誌』第6巻第3号
- 大場磐雄 1967 「日本における洞穴遺跡研究史」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 平凡社
- 大山 柏・八幡一郎 1925 「岩手県南部石器時代遺跡調査旅行」『人類学雑誌』第40巻第10号 東京人類学会
- 小樽市教育課編 1937 『小樽市の史蹟名勝天然記念物』小樽市教育課
- 笠原烏丸 1933 「楕圓捺型紋土器資料」『考古学』第4巻第7号 東京考古学会
- 柏倉亮吉・江坂輝彌・酒井忠純・酒井忠一・加藤稔 1955 『吹浦遺跡』荘内古文化研究会
- 直良信夫・吉田 格 1939 「出雲国森山村崎ヶ鼻第1号洞窟出土遺物」『考古学雑誌』第29巻第8号 考古学会
- 金子富雄 1933 「長野県上水内郡柵村追通石器時代洞窟住居址」『史前学雑誌』第5巻第5号 史前学会
- 川合 剛編 2004 『名古屋市博物館資料図版目録5 愛知の縄文遺跡』名古屋市博物館
- 川田信敏 1941 「土佐で押型文土器の発見」『古代文化』第12巻第8号 日本古代文化学会
- 神田五六・金井喜久一郎 1933a 「上水内郡柵村追樋石器時代洞窟の調査報告」『信濃』第2巻第6号 信濃郷土研究会
- 神田五六・金井喜久一郎 1933b 「柵村追樋石器時代洞窟の調査報告補遺」『信濃』第2巻第7号 信濃郷土研究会
- 木下克己 1975 『八名郡の先史遺跡』豊橋石巻地区文化財保存会
- 倉光清六 1933 「所謂楕圓捺型紋土器の一発見例-伯耆大道原遺跡発見品-」『考古学』第4巻第1号 東京考古学会
- 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡 綜括編』名古屋鉄道株式会社
- 小金井良精 1933 「安房神社洞窟人骨」『史前学雑誌』第5巻第1号 史前学会
- 小林久雄 1934 「所謂楕圓捺型文土器に就て」『考古学』第5巻第6号 東京考古学会
- 小林久雄 1937 「宮崎県北諸縣郡中郷村二俣尾平野洞窟住居址」『考古学』第8巻第5号 東京考古学会
- 小林行雄 1934 「楕圓捺型文の施文具」『考古学』第5巻第10号 東京考古学会
- 小牧實繁・直良信夫・藤岡謙二郎 1941 「近江佐目の洞窟遺蹟」『古代文化』第12巻第8号 日本古代文化学会
- 小山眞夫 1932 「信濃国小縣郡の岩窟古墳」『考古学雑誌』第22巻第2号 考古学会
- 齋藤 勝 1932 「福井県丹生郡茂原村附近洞穴の遺蹟」『考古学雑誌』第22巻第11号 考古学会
- 齋藤基生 2002 「嵩山蛇穴遺跡」『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』愛知県史編さん委員会編 愛知県
- 佐々木謙・小林行雄 1937 「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟-中海沿岸縄文式文化の研究-」『考古学』第8巻第10号 東京考古学会
- 佐藤伝蔵 1920 「地学上より見たる越中氷見の洞窟」『地学雑誌』32-377
- 七田忠志 1934a 「佐賀縣戰場ヶ谷出土弥生式有紋土器に就て」『史前学雑誌』第6巻第2号 史前学会
- 七田忠志 1934b 「其の後の佐賀縣戰場ヶ谷遺蹟と吉野ヶ里遺蹟に就いて」『史前学雑誌』第6巻第4号 史前学会
- 柴田常恵 1918 「越中国氷見郡宇波村大境の白土社洞窟」『人類学雑誌』第33巻第7号 日本人類学会

- 柴田常恵 1927「石器時代住居址概論」『石器時代の住居址』柴田常恵・谷川磐夫 雄山閣
- 島田貞彦・濱田耕作 1921「薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第6冊』京都帝国大学
- 白石浩之 2014「日本における洞穴遺跡の研究」『愛知学院大学文学部紀要』第44号 愛知学院大学文学部
- 醉古 生 1933「柵村洞窟雜記」『信濃』第2巻第6号 信濃郷土研究会
- 杉山壽栄男 1933「北海道古式土器と亀ヶ岡式土器に就て」『北海道原始文化聚英』犀川会編 民族工藝研究會
- 杉山壽栄男 1938「北海道石狩国浜益村岡島洞窟遺蹟」『人類学雑誌』第53巻第7号 東京人類学会
- 高橋健自 1909「越前国甲楽城浦の史蹟に就きて」『考古界』第8篇第7号 考古学会
- 田中和三郎 1941「天然記念物（一）嵩山の石灰洞（嵩山の蛇穴）」『愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第二十』愛知縣
- 千葉県 1928『史跡名勝天然記念物調査 第5輯』千葉県
- 坪井正五郎 1896「北海道手宮に於て発見されたる古代彫刻」『史学雑誌』第7編第4号 史学会
- 鳥居龍蔵 1913「北海道手宮の彫刻文字に就て」『歴史地理』第22巻第4号 日本歴史地理学会
- 鳥居龍蔵 1924a「下伊那の先史及原史時代」信濃教育会下伊那部会
- 鳥居龍蔵 1924b『諏訪史』第1巻 信濃教育会諏訪部会
- 鳥居龍蔵 1926『先史及原史時代の上伊那』信濃教育会上伊那部会
- 直良信夫 1937「崎ヶ鼻第一号洞窟及び権現山洞窟の自然遺物」『考古学』第8巻第10号 東京考古学会
- 直良信夫・吉田 格 1939「出雲国森山村崎ヶ鼻第1号洞窟出土遺物」『考古学雑誌』第29巻第8号 考古学会
- 中目 覚 1918「北海道手宮洞穴の鞅鞅語墓誌について（上）（下）」『歴史と地理』第1巻第6号・第7号 史学地理学同致会
- 長山源雄 1927「豊後国直入郡地方の石器時代と遺跡」『考古学雑誌』第17巻第1号 考古学会
- 長谷部言人 1918「大境洞窟の遺跡について」『河北新報』大正7年10月号
- 長谷部言人 1919「羽後吹浦一本木貝塚」『人類学雑誌』第34巻第8号
- 長谷部言人・酒詰仲男 1941「土佐佐川町城台石灰洞堆積調査概報」『人類学雑誌』第56巻第9号 日本人類学会
- 畑山智史・遠部 慎・村上 昇 2015「嵩山蛇穴における基礎的研究・その1－調査研究史の整理と自然遺物の分析－」『豊橋市美術博物館研究紀要』18号 豊橋市美術博物館
- 樋口清之・乙益重隆 1938「鹿兒島県加治木日本山洞窟遺蹟の研究」『史前学雑誌』第10巻第2号 史前学会
- 北海道庁 1911『北海道名勝誌』北海道庁
- 松村 瞭 1918「新発見の洞窟内遺跡」『教育画報』第7巻第1号 教育學術研究会
- 増井経夫 1927「上総興津町附近自然洞穴発掘報告」『考古学雑誌』第17巻第12号 考古学会
- 町田 生 1933「柵の洞窟踏査」『信濃』第2巻第6号 信濃郷土研究会
- 水ノ江和同 2020「特集にあたって－洞窟遺跡の過去・現在・未来－」『季刊考古学』第151号 雄山閣
- 村上 昇 2019「小栗鉄次郎による嵩山蛇穴洞窟遺跡発掘調査記録について（1）」『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流－研究の視点－』白石浩之編 六一書房
- 八木貞助 1933「柵村先住民遺跡洞窟附近の地質」『信濃』第2巻第6号 信濃郷土研究会
- 野帳の会編 2013『久永春男先生遺跡調査日誌－昭和15年・昭和19年・昭和21年～昭和25年－』野帳の会
- 山崎直方 1925「上総守谷洞窟に於ける史前時代の遺跡に就きて」『人類学雑誌』第40巻第3号 東京人類学会
- 山内清男 1930「斜行縄文に関する二三の問題」『史前学雑誌』第2巻第3号 史前学会
- 山内清男 1934「江名子ひぢ山の土器について」『石冠』第2年第3号 飛騨考古土俗学会
- 山内清男 1935「古式縄紋土器研究最近の情勢」『ドルメン』第4巻第1号
- 山内清男 1937「縄紋式土器の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号 先史考古学会
- 山内清男 1939「日本遠古之文化 補注」（山内清男 1967『山内清男・先史考古学論文集 第一冊』先史考古

学会 所収)

山本 博 1932「福井県関の山洞窟とその遺物」『考古学雑誌』第22巻第4号 考古学会

八幡一郎 1928『南佐久郡の考古学的調査』岡書院

八幡一郎 1932「楕圓捺型紋土器」『考古学』第3巻第6号 東京考古学会

両角守一 1928「信濃諏訪郡四賀村古岩窪原史時代遺跡に就いて」『人類学雑誌』第43巻第1号 東京人類学会

領塚正浩 2019「ヨハネス・マーリンガー神父と考古学研究所」『南山大学人類学博物館紀要』第38号 南山
大学人類学博物館

若林勝邦 1894「石器彙報 三角形ノ石器」『東京人類学会雑誌』第9巻第95号 東京人類学会

J.Miline1880'Notes on stone implements from Otaru and Hakpodate,with a few general remarks on the
prehistoric remains of Japan' "Transactions of the Asiatic Society of Japan" vol.8